

Title	石垣島の「エコツーリズム」を紡ぐ実践と語り
Sub Title	Ecotourism in Ishigaki Island constructed through practice and narrative
Author	下田, 健太郎(Shimoda, Kentaro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.107- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石垣島の「エコツーリズム」を紡ぐ実践と語り

Ecotourism in Ishigaki Island Constructed through Practice and Narrative

下田 健太郎

1. はじめに

本稿の目的は、「エコツーリズム」に着目し、石垣島における資源利用のあり方を検討することである。

かつて「開発か保護か」という二項対立的な見方でとらえられていた沖縄のサンゴ礁は、観光資源として新たに「発見」されることで、保護と同時に利用の対象ともみなされるようになった（家中 2007）。サンゴ礁に新たな価値が付与されたことで、サンゴ礁生態系の破壊につながる無秩序な開発には一定の歯止めがかかるようになったものの、マスツーリズムが引き起こす自然への負の影響が新たな問題として浮上してきている。先進国各地で同様の問題が顕在化しはじめたことをうけて、国連は1992年にブラジルのリオで開催された「地球サミット」から10年という節目の2002年を「国際エコツーリズム年」とし、「エコツーリズム」を地球環境問題のための有効な取り組みと位置づけた。日本エコツーリズム協会は「エコツーリズム」を「資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方」と定義している¹⁾。

近年、人文社会科学の領域でも「エコツーリズム」を対象とした研究が行われてきている（池田1996、菊地1999、松村2001、海津・真板2001、下休場2006）。菊地は、「エコツーリズム」を一つの「メディア」としてとらえることで、自然保護などの外部の枠組みを受け入れつつ再構築する地域住民の実践を描き出そうと試みている（菊地1999）。菊地の視座によれば、「エコツーリズム」は実体をもつ概念というより一つのメディアであり、「自然や環境への意識を創り出す媒体」（ibid: 145）である。環境運動において「よそ者」が地域に「普遍的な視野」をもたらし、「よそ者」自身も当該地域での生活のなかで変容していくと鬼頭が指摘しているように（鬼頭1998）、外部の枠組みと地域住民の関係は相互作用のなかで変容していくのである。筆者が石垣島で調査を進める過程で、「何が『エコ』なのか」という語りをよく耳にした。また、「かたちだけの『エコツーリズム』だけではなくて付加価値をつけていきたい」と語る地域住民もいた。これらのことをふまえ、本稿では「エコツーリズム」を厳密に定義した上で議論を進めるのではなく、「エコツーリズム」というメディアを介してどのような意識や実践が生み出されているのかという問題を議論することにしたい。以下では、まず石垣島の観光の現状と「エコツーリズム」の導入過程を概観する。その上で、「エコツアー」の参与観察ならびに聴きとりから得られた情報をもとに、石垣島の「エコツアー事業者」による自然環境や文化的環境への意味付与の実践とその動態について考察し、石垣島における資源利用のあり方の一端を読み解くことにしたい²⁾。

2. 石垣島観光の現状

沖縄の観光産業は本土復帰に伴う「沖縄振興開発計画」や「沖縄振興特別措置法」の制定、その後の沖縄県による「沖縄県観光開発基本計画」、「観光条例」の制定、そして、バブル経済下のいわゆる「リゾート法」をベースに発達してきた。沖縄県の離島への入域観光客数をみると、特に石垣島における増加が顕著である(図 1)。石垣市が観光立市を宣言した 1997 年以降も観光客は増え続け、2009 年時点での入域観光客数は約 73 万人である(沖縄県 2012)。観光客の増加による環境負荷が問題視されるほど、観光は石垣島の経済を支える重要な産業となっている(石垣市 2010)。

日本交通公社(2008)は、春季、夏季、秋季、冬季の 4 回にわたって石垣空港で観光客を対象と

したアンケート調査を行い、1256 件の回答を得ている。図 2 は石垣島での訪問先に関するアンケート結果をもとに、回答数が 100 件以上の訪問先を地図上にプロットし、その名称とカッコ内に回答件数を示したものである。これをみると、サンゴ礁の景観で有名な川平公園、玉取崎展望台、平久保崎、米原海岸だけでなく、市街地にある公設市場や唐人墓、石垣島鍾乳洞なども上位を占めていることが分かる。すなわち、石垣島ではサンゴ礁が観光客を惹きつけてはいるが、それだけが利用されているわけではなく、多様な要素が観光資源として活用されていると言えよう。それでは「エコツーリズム」に着目して石垣島における資源利用のあり方をみていくとどうだろうか。

3. 石垣島への「エコツーリズム」の導入と展開

八重山圏域で最も早い時期に「エコツーリズム」の導入がはかられたのは西表島である。1990 年当時、環境庁は「国内エコツーリズム推進方策検討調査」の候補地として西表島を選定し、島民の協力を得て全島資源調査を行った。その成果をもとに 1994 年には『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥー 西表島エコツーリズムガイドブック』が出版され、「西表をほりおこす会」や竹富町観光協会青年部のメンバーが中心になって 1996 年に「西表島エコ



図 1 沖縄県離島の入域観光客数推移

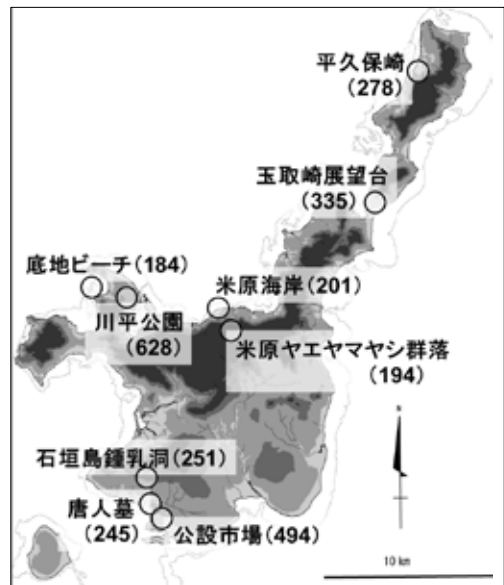


図 2 石垣島における観光客の主な訪問先 (日本交通公社 2008)

ツーリズム協会」を発足させた。

それから4年後の2000年、石垣島では初めての「エコツーリズム」関連団体である「石垣島エコツアー連絡会」（以下、「連絡会」と表示）が発足した。「エコツーリズム推進協議会」（現、日本エコツーリズム協会）の1999年度年報には、同会の設立経緯が次のように説明されている。

「隣に西表島という知名度全国区の自然があるため、石垣島の自然についてはこれまであまり注目されてこなかった。…（中略）…ところが、新石垣空港問題や最近のエコツーリズムブームの影響で、石垣島の自然は手軽な自然体験の場として注目されるようになった。知名度が上がると、エコツーリズムを謳ったマスツアーによる自然破壊も予想される。これを未然に防ぐため、環境キャパシティーを考えた、地元主導の石垣島型エコツアーを実現するため、『石垣島エコツアー連絡会』が設立された。」（エコツーリズム推進協議会 n.d.）

しかし、連絡会は数年で実質的な活動を休止したことが聴きとりから分かっている。その後、「石垣島沿岸レジャー安全協議会」（以下、「安全協議会」）が2005年に発足し、2006年には「エコツアーガイドライン」を作成した。2010年にはエコツアーのガイドラインや事業者間のルール策定を目的に「石垣島西部ガイド協会」（以下、「ガイド協会」）が発足した（八重山毎日新聞2010年6月9日）。さらに2011年には連絡会の代表者だった人物を会長として「石垣島エコツーリズム協会」（以下、「エコツーリズム協会」）が発足した。基本的に安全協議会、ガイド協会、エコツーリズム協会にはそれぞれ別の事業者が所属しており、複数の会に所属する事業者は少ない³⁾。また、これらの団体に所属していない自然体験型観光事業者も多く存在する。これらのことは、石垣島で「エコツーリズム」という概念が画一的に理解されているわけではないということを示唆している。

連絡会が「環境キャパシティーを考えた地元主導の石垣島型エコツアー」の展開を目指していたのに対し、安全協議会作成のガイドライン（2006年）では「参加者の安全確保、フィールドへの環境負荷の回避、フィールドを利用する地域住民の皆さんとの調和」が「三本柱」の課題として挙げられている。これに対して、エコツーリズム協会による『石垣島エコツーリズム協会』が目指すことと題された文書（2011年）では、「島の自然によって生かされ、島の自然に根ざした文化」を「持続可能な島の暮らしの本来の姿」とした上で、「島の外から流れ込む自然に根ざさない文化の洪水」のなかで「持続可能な島の暮らし」を維持するために「自然観察という科学を生活の中に文化として根付かせる」ことを目指すとしている。このように、環境保全を意識した観光の形態をそれぞれに模索しているのが石垣島の「エコツーリズム」をめぐる現状であると言える。

4. 石垣島の「エコツアー事業者」

「エコツーリズム」を定義しないで議論をすすめる以上、石垣島の「エコツアー事業者」を客観的に抽出することは不可能である。そこで本稿では、ホームページや雑誌において「エコツアー」を自称する、もしくは、「エコツーリズム」・「エコツアー」を名称に冠する団体に所属する自然体験

型観光事業者を「エコツアー事業者」(以下、「事業者」とみなす。その基準にもとづき、ホームページや観光ガイドブック、聴きとりの情報から石垣島で営業する 27 の事業者を抽出することができた。なお、石垣島にはこのほかにも八重山ダイビング協会所属のダイビング業者が 82 業者⁴⁾、「エコツアー」を自称せずシュノーケリング、カヤック、グラスボートを利用あるいは自然体験型の観光案内を行う事業者が 48 業者存在するが⁵⁾、以下の分析対象には含まない。事業者のホームページと聴きとりの情報をもとに、事業者の所在地、開業年、事業代表者の出身地について調べ、2 つの図を作成した。図 3 は事業所の数を地区ごとにプロットしたものであり、図 4 には事業代表者の出身地を色分けした上で、事業者の総数の推移を示した。なお、図 4 には開業年不明の 12 事業者が含まれており、これらは時間軸上の「現在」に加算した。図 3 をみると、サンゴ礁で有名な湾を観光資源として有する川平地区、マングローブ林を有する吹通川や宮良川の周辺(椗海地区や宮良地区)に多くの事業所が立地している。しかし、石垣や新川といった市街地やサンゴ礁で有名な白保などにも点在している。図 4 からは、(1) 1995 年に島外出身者によって「エコツアー」が始められた可能性が浮かび上がるとともに、(2) 特に 2001 年以降に島外出身者事業者の著しい増加が読みとれる。開業年不明の事業者が存在するため (1) については「可能性」としたが、聴きとり調査で確認したところ、多くの事業者が 1995 年に開業した島外出身者を「エコツアー」の先駆者と位置づけていた。このことから少なくとも、石垣島で「エコツアー」を開業したのは、島外出身者→島内出身者という順番であったと考えられる。事業代表者の出身地は、全 27 業者のうち島内出身者 5 名、島外出身者 16 名、不明 6 名であり、半数以上が石垣島への移住者で占められていることが分かる。

5. 「島の人」と「移住者」

筆者は、2010 年から 2012 年にかけて「エコツアー」を営む 27 業者のうち 7 名の代表者に聴きとりを実施した。7 名の内訳は島内出身者 2 名と島外出身者 5 名であり、

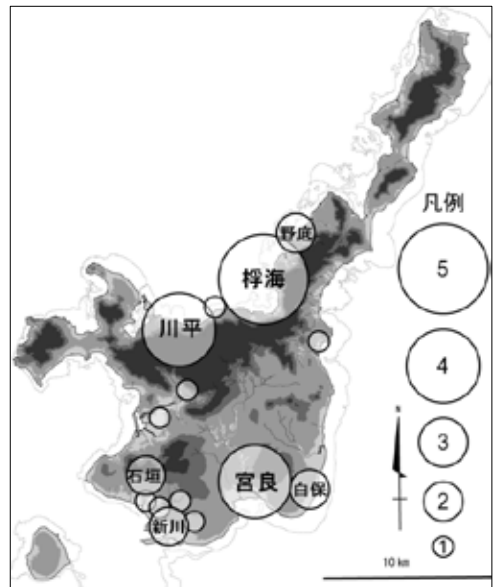


図 3 エコツアー事業所の立地

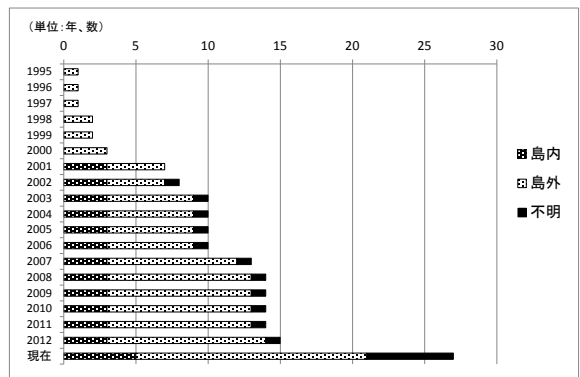


図 4 事業者の開業年と代表者出身地

「安全協議会」、「ガイド協会」、「エコツーリズム協会」それぞれに所属している事業者、ならびに90年代に開業した事業者から2000年代後半に開業した事業者までを含んでいる。この7名のうち5名には複数回にわたって聴きとりを重ねた。また、行政機関の職員や自然保護活動家など関係者8名にも聴きとりを行った。そして、5社の「エコツアー」に実際に参加した。なお、以下に表示する語りは、聴きとりの際のメモをもとに筆者が再構成したものである。

筆者が接触しえた島外出身の事業者たちは、石垣島の自然に対する強い愛着をもち、環境保全への高い意識を示す傾向にあった。たとえば、「石垣島のポテンシャルがすごっていうのは分かった。海は西表より石垣の方がいい」(Aさん、50代男性、2012年3月12日聴きとり)、「自然の素晴らしさに惚れていつか暮らしたいと思った。石垣には海も山も川もある」(Bさん、50代男性、2011年5月19日)といったように、石垣島の自然の素晴らしさについての語りがよく聴かれた。彼/彼女らの多く(5名中3名)は環境省のパークボランティアに参加しており⁶⁾、そうでなくとも清掃活動には定期的に参加しているとのことであった。さらに、筆者が参加したツアーにおいても、島外出身のガイドがゴミを拾う姿を何度か見かけた。「海は西表より石垣の方がいい」、「石垣は海も山も川もある」といった語りが示唆するように、彼/彼女らの多くが「自然」を俯瞰する視点を獲得している点も特徴的であった。

島外出身事業者のもう一つの特徴として、「よそもの」としての自覚とともに「地元の人たち」との意識の違いを語る点が指摘できる。この傾向は特に沖縄県外からの移住者の人に顕著であった⁷⁾。「石垣島に来てしばらくすると島の日常になじんでくる。『よそもの』の目線も消えてくる。一緒に島の人と飲みに行くこともある。でもどこかで『よそもの』の意識は感じる」(Eさん、20代男性、2011年5月20日)。また、筆者が参加したツアーでガイドをつとめたある島外出身事業者は、島の人の「日本人」という呼称に驚きを隠せなかった体験について語ってくれた。さらに、島の人による移住者の呼称のひとつに「島ナイチャー」があることも分かってきた。ある島の人はこの呼称について、「石垣島に移住してきた本土出身者で商才がある人々」のことを指すと、やや不満そうに語っていた。この呼称は2000年代の「移住ブーム」と呼ばれる流れのなかで、石垣島に移住してきた多数の人々、そして観光産業がもつ地元を素通りしがちな性質と無関係ではないだろう。だからこそ、「沿岸レジャー安全協議会」が策定したガイドラインには「地域住民の皆さんとの調和」が重要な課題とされていたと考えられる。筆者が接触し得た島外出身事業者の人々は、小中学校における環境・観光教育の講師として、あるいはツアーのなかで料理を提供する際には地元産の食材を用いるというかたちで、地域への還元を重視する傾向にあった。

「よそ者」としての自覚を語ってくれた島外出身事業者は同時に、島の人との意識の違いを次のように語っていた。

「漁師には、サンゴがたくさん無い方がいいと言う人もいる。理由は網がからまる、歩くと痛い、船が傷つく、航路が無いとか色々。小学校で学ぶ子どもたち、そのお父さんやオジイは赤土をバンバン流す。子どもはサンゴが大事と教わる。この帳尻合わせをどうするか。これを考えて実践

につなげていくことも一つの環境活動だと思っている。」(E さん、2011 年 5 月 20 日)

また、筆者が「石垣島に住む人々が昔から伝えてきた、この島で生きて行く知恵や伝承を、オジイやオバアから教えてもらうこともあったんですか？」と質問すると、ある島外出身事業者は次のように答えた。

「それは僕たちが苦手なところだね～、オジイやオバアはどちらかと言えば自然を壊してきた人たちだから。公民館の役員や PTA をしてるからそういうところで話をすることはあるけど、農業を川に流して浮いた魚を食べてたりとかそんな話だもん。エコツアーで話すにはねえ。」(C さん、40 代男性、2010 年 8 月 26 日)

一方で、島の人も移住者との意識の違いについて語っていた。島内出身のある関係者は「自然保護がんばってくれているのは移住組が多い」と評価するかたわら、「移住者に対しては考え方の違いを感じる。シマンチュも観光業に流されている人がいる」(2010 年 8 月 20 日)と語っていた。「日本人」や「島ナイチャー」といった呼称、そして、「エコツーリズム」をめぐる当事者の語りは、「島の人」／「移住者」という二元論的構図が意識されていることを示唆している。

6. 眺める？かかわる？

筆者が参加した 5 社の「エコツアー」のうち一つは、島内を一周し、平久保崎、玉取崎展望台、吹通川マングローブ、米原のヤエヤマヤシ群落、川平湾、名蔵アンパル⁸⁾、白保を巡るものであった。それ以外の 4 社のツアーは、名蔵アンパルなど特定の地域内で自然観察やシュノーケリング、カヌー体験を行うものであった。筆者はツアーに参加しつつ、ガイドが解説する自然や文化的な景観に関わる名称を網羅的に記録した。表 1 は、あるツアーでガイドが解説した名称を、「生物」・「植物」・「地形」・「民俗」に分類して一覧化したものである。なお、「生物」と「植物」には標準和名を用いて解説された名称を、「地形」には標準語または英語で解説された名称を、「民俗」には生物、植物、地形それぞれについて石垣島の言葉で解説された名称をそれぞれ記

表 1 ツアー中に解説された名称 (a 社)

生物	植物	地形	民俗
サンゴ	ドラゴンフルーツ	リーフ	クチ
キジ	テリハボク	ラグーン	オキナワグチ
シロバルクイナ	クワズイモ	丘陵地	ダルマーグチ
アオタテハモドキ	アダン	平野部	ヤスラーグチ
ヤシガニ	ハスノハギリ		ヤラブ
スジグロカバマダラ	オオバイヌビワ		ムーチー
ムラサキ	オキナワキョウチクトウ		オン
ミナミスナガニ	ソテツ		
イソハマグリ	クサトベラ		
アオウミガメ	モンバナキ		
ベニモンアゲハ	クロヨナ		
ハクセンシオマネキ	ヤエヤマヒルギ		
ヒメシオマネキ	ゲンバイヒルガ		
ミナミトビハゼ	オオタニワタリ		
キノボリカゲ	コミノクロツグ		
サキシマトカゲ	ギランイヌビワ		
ミナミコメツキガニ	ヤエヤマヤシ		
コメツキガニ	ヒルギダマシ		
ベニシオマネキ	オヒルギ		
キバウミミナ	アコウ		
シレナジミ	ガジュマル		
アラスジケマンガイ	モモタマナ		
リュウキュウオサガニ			
イチジクコバチ			

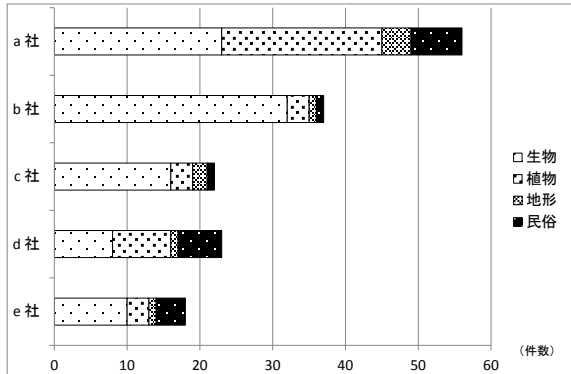


図5 ツアー中に解説された名称件数の比較

形」や「民俗」の名称は少ないことが分かる（図5）。この5社に関する情報ではあるが、石垣島の「エコツアー」に関して（1）サンゴ・サンゴ礁の利用の少なさ、（2）生物と植物の解説が大半を占める、（3）民俗に関する説明の少なさの3点を指摘しておきたい。これらのことは、「エコツアー」のなかで自然解説の技能、すなわち「眺めるための知識・技能」が重視されていることを示唆するからである¹⁰⁾。

一方、西表島エコツーリズムのガイドブック『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥ』には、これとは対照的な特徴をみることができる。タイトルが「山・川・海・人」を意味する現地の言葉で構成されている点にも表れているように、島の人たちが生活のなかで培ってきた自然と「かかわるための知識・技能」¹¹⁾が島の人自身の手によってつづられている点が特徴的である（石垣ほか1994）。この本では、西表島の自然、生き物、場所、祭りなどが現地の呼び方をもとに解説されているだけでなく、漁やタコ採りといった「自然採取の知恵と技」から島の人の遊び場、有用植物の用途まで具体的に紹介されている。次に、自然と「かかわるための知識・技能」の詳細について、島内出身の事業者の語りからみていくことにしたい。

7. 島内出身事業者の語り

ここでとりあげるFさん（50代男性）は漁師であり、漁業を営むかわら漁業体験を行う観光ツアーを実施している。Fさんは「資源の保護＝環境保全という考え方は分からない。『サンゴ礁を増やしたい、増えれば魚が増える』という考え方は理屈では分かる。しかし、現場ではそうでもない」と語り、生態系の固定的な保全よりも「資源管理がメイン」であることや「漁民の体感」を強調していた（2010年8月25日）。Fさんが「漁民の体感」と呼ぶものは、漁での経験から培われたものであろう。Fさんは毎年10月から6月にかけて名蔵湾周辺で小型定置網（マサーミ）漁を行ってきており、その経験にもとづいて次のように語る。

「名蔵湾はいい海。昔はサンゴ礁がいっぱいあったのではないかという痕跡がたくさんある。水

深 1 メートルぐらいの場所に埋まっている棒状のサンゴのがれきには、太さが最大で親指 2 本分ぐらいのものもある。ここ 20 年から 30 年くらいはサンゴが生まれて死ぬまでのサイクルが早い。今でも素晴らしい漁場。名蔵には産卵期 (旧暦の 3~5 月) にたくさんの魚が来る。サンゴ礁の魚や回遊魚も。アイゴの種類とシロイカの種類がメインだが、他にもミーバエ (ハタ科の魚)、フチナギ (フェフキダイ属の魚)、カタカシ (ヒメジ科の魚)、ガーラ (アジ科の魚) がくる。名蔵はこれだけの種類がまとまった量で同時に網に入る特殊な場所。」(2011 年 8 月 24 日、カッコ内筆者)

F さんは毎年 7 月から 11 月にかけてカゴ網 (ティールグアー) 漁に従事しており、その経験から次のように語る。

「サンゴは海の中で折ったくらいじゃ死なない。カゴ網のカモフラージュに生きたサンゴを使う。カゴの周りを囲むように折ったサンゴを配置する。サークル上に再生することはいっぱいある。8 割くらいは 1 年から 2 年で再生する。小浜島のすぐ周辺の海域ではサンゴが再生しない。」(2011 年 8 月 24 日)

筆者が聴きとりを行ったもう一人の島内出身事業者 G さん (40 代男性) は、生まれ育った場所でカヌー体験のツアーを実施している人物である。G さんは、リゾート計画のために事業所の移転を余儀なくされてしまったが、2011 年までテリハボク (ヤラブ) の巨木の並木道に、事業所の入り口を構えていた。このテリハボクの並木は G さんが生まれ育った集落の先祖が植えたもので、国道を拡張する計画が出たときに伐採するという提案もあったが、G さんの父親を含む地元の公民館役員が石垣市に保全を要請したことで伐採を免れた。「だからヤラブ並木の方に (事務所の) 入口をかまえたっていうのが俺の理想だったの。並木道のなかでお迎えするっていうか」(2011 年 5 月 20 日、カッコ内筆者) と語る G さんにとって、テリハボクの並木は集落の先祖から父親に、そして自分へと連なるある種の物語性を帯びている (写真 1)。「生まれ育ったからこそできることがある。小さい頃の風景。そこからの変化は伝えられる。『保全』はできない。移り変わりを記憶としてみて、次世代に伝えていきたい… (中略) …誰よりも (生まれ育った場所を) 知ってる。そういう風になりたい。マングローブのどういうところに痛みがあるかとか。海岸林の変化。生き物たち



写真 1 テリハボクの並木道

の様子。『環境』というと大きくて難しくなる」(2011年5月20日、カッコ内筆者)と語るGさんは、Fさんと同様に、生態系の固定的な保全よりも自然とのかかわり方を強調していた。

「負荷をかけてるっていうのを分かってくっていいのかな。かたちだけの『エコツーリズム』だけではなくて、文句ばかり並べるだけではなくて付加価値を付けていきたいわけよ。干潟にいっぱい生き物がいるというと、カニとかを踏みつぶすのが怖くて歩かなくなる女の子もいる。そういうことじゃないんだけどなーと思う。『僕たちは日ごろからやっているんだよー』と声をかける。それがいけないこととは絶対言えないさー」(2012年3月13日)

これらの語りからは、Gさんが「エコツーリズム」というメディアを介して、「眺める」だけではなく「かかわる」だけでもない、また、「保全」するだけではなく「利用」するだけでもない、新たな観光の形態を模索していることがうかがえる。生まれ育った土地で培ってきた「負荷をかけてる」という感覚や「マングローブの痛み」、その感覚にもとづいて目の当たりにしてきた景色の移り変わりの「記憶」を次世代に受け継いでいく営みである。それは自然とのかかわりながら変化を眺めてきたGさんによる、「眺めるための知識・技能」と「かかわるための知識・技能」の節合を試みる実践と評価できるかもしれない。

8. おわりに

本稿から得られた知見として、以下の3点をあげることができる。(1) 筆者が接触しえた「エコツアー」においてはサンゴ・サンゴ礁利用が占める割合が少なかったこと、(2) 「エコツーリズム」関係者間のすれ違いに「島の人」／「移住者」の構図がかかわっている可能性、(3) 「エコツアー」では自然を「眺めるための知識・技能」が強調されがちで、「かかわるための知識・技能」が活かされる場面は少ないことである。(3)は、「島の人」／「移住者」という構図を生み出す背景の一つであると同時に、石垣島の「エコツアー事業者」に島の人が少ない理由とも関わっている可能性がある。

次に、島内出身事業者であるGさんが「エコツーリズム」というメディアを介して、「眺めるための知識・技能」／「かかわるための知識・技能」を節合した新たな観光の形態を模索していることについてみてきた。Gさんは、自身の想いが「いつの間にか浸透していけばいい」との思いで賛同するメンバーをつのり、「石垣島エコツーリズム協会」の立ち上げを提案した人物でもある。自然と「かかわるための知識・技能」を活かす道筋が開けば、石垣島の「エコツーリズム」はこれまでとは異なる展開をみせるかもしれない。また、そのことが多様な当事者間のコミュニケーションの円滑化につながる可能性もあるだろう。

本稿では、「エコツーリズム」に関する外部の枠組みと地域住民の相互作用については十分に議論することができなかった。自然環境や文化的環境への新たな意識を生み出す媒体として「エコツーリズム」を位置づけるならば、研究者も「エコツーリズム」に関与する主体になりうる。むしろ、

科学的知識にもとづいて「発見」した自然を、資源として評価することが地域社会側から研究者に求められているといってもよい (cf. 海津・橋本・真板 1997)。その展望として、研究者によるアウトリーチ活動の可能性について最後に記しておきたい。

文部科学省新学術領域「サンゴ礁－複合ストレス下の生態系と人の共生・共存未来戦略」の人文社会科学研究班 (B02 班「サンゴ礁－人間共生系の景観史」、代表者：山口徹) は、2010 年 8 月、2011 年 8 月にそれぞれ 2 日間ずつ石垣島で研究成果公開講演会を開催した¹²⁾。人間の営為と自然の絡み合いや、陸域と海域を包摂するローカルな歴史の通史的把握を目的に、石垣島名蔵地区で過去 8 回の調査を実施してきた研究班である。自然体験型観光の繁忙期の開催ではあったが、これらの講演会には本稿で対象とした 4 名の事業代表者が来場した。講演会に来場するだけでなく、B02 研究班の調査協力者でもあった事業者 B さんは、「名蔵の環境の変化が、海面変動じゃなくて浸食というのが間違いないって言っていた。自分の推測とは違うけど、こういうのが出てくるのが面白い… (中略) …こんな調査に参加してこんな知識が得られたということそれ自体が一つの物語になる。説明会に参加してこんな話を聞いたという経験も一つの物語になる」(2012 年 3 月 14 日、傍点筆者)、「岩が 3000 年前に隆起したという説明をしていたが、マイクロアトール¹³⁾について細かい数字が出てきたのは大きい。マイクロアトールは知っていたが、慶應隊 (B02 研究班) の調査はなぜここにマイクロアトールがあると面白いかを裏付けてくれる」(2011 年 5 月 19 日、カッコ内および傍点筆者) と語り、調査や講演会に参加した経験を名蔵地区に関わる「一つの物語」として「エコツアー」に組み込もうと試みていることを教えてくれた。ローカルな歴史を対象とした研究成果や調査プロセスそのものが、観光資源の幅を拡大しうる可能性がここに浮かび上がるのである¹⁴⁾。

[謝辞]：本稿を作成するにあたり、聴きとりをさせて頂いた石垣島の皆さま、石垣市教育委員会文化課、石垣市立図書館、名蔵公民館、八重山博物館の皆さまにご協力頂くと同時に、多くのことを教えて頂きました。山口徹先生 (慶應大) には、本稿の構成段階からご指導頂きました。査読者の方からは適切なコメントを頂きました。図の作成にあたっては小林竜太氏 (慶應大) にご協力頂きました。末筆ではありますが、この場を借りて深く御礼申し上げます。

[付記]：本研究は、文部科学省新学術領域「サンゴ礁－複合ストレス下の生態系と人の共生・共存未来戦略」の計画研究 B02 (「サンゴ礁－人間共生系の景観史」、代表者：山口徹) の一部である。

【註】

- 1) 日本エコツーリズム協会ホームページ (<http://www.ecotourism.gr.jp/>、2012 年 12 月 10 日アクセス)。「エコツーリズム」概念の歴史的展開については海津・真板 (2001) に詳しい。
- 2) 本稿で用いるデータは、2010 年 3 月、8 月、2011 年 5 月、8 月、2012 年 3 月に行った現地調査にもとづく。これらの調査はすべて、文部科学省新学術領域「サンゴ礁－複合ストレス下の生態系と人の共生・共存未来戦略」の計画研究 B02 (「サンゴ礁－人間共生系の景観史」、代表者：山口徹) の一環として行われたものである。

筆者は石垣島の「エコツーリズム」関係者への聴きとり調査と「エコツアー」への参与観察を中心に行うとともに、B02 研究班の活動の記録を行った。

- 3) 聴きとりから、「安全協議会」への所属業者は2010年時点で14、「エコツーリズム協会」に所属している業者は発足時点(2011年)で6(そのうち自然体験型観光業者は3)だったことが分かっている。「ガイド協会」への所属業者は発足時点(2010年)で7である(八重山毎日新聞2010年6月9日)。
- 4) 八重山ダイビング協会ホームページ(<http://www.isigakizima.com/>、2012年12月10日アクセス)。本稿で言う「エコツアー事業者」に含まれ、かつ八重山ダイビング協会に加盟している業者が1つ存在する。
- 5) 空港などで観光客向けに無料配布されている冊子『やえやまなび 2012年版』、『石垣島タウンガイド 2012年改訂版』を参照した。
- 6) 環境省は、自然保護の普及啓発を目的に、国立公園での自然観察会等の解説活動や美化清掃などの各種活動に自発的に協力する人々を「パークボランティア」として登録している。
- 7) 沖縄県出身のある事業者は、「ホテルの人見てみなよ。地元の人ほとんどいないから。けっきょく本土というか外資でそっちにいくからお金は落ちない。石垣に来てから自然が悪くなってきている。業者も増えてリゾートホテル、開発の歴史だよな。」(Aさん、2012年3月12日、傍点筆者)と語っていた。
- 8) 名蔵アンパルとは、石垣島南西部の名蔵川河口に広がる干潟およびマングローブ林を含む地域である。
- 9) サンゴ・サンゴ礁に関わる名称としては他社のツアーにおいても、生物についての説明のなかで「サンゴ」、「アオサンゴ」が、地形についての説明のなかで「マイクロアトール」、「リーフ」、「リーフエッジ」、「リーフカレント」、「琉球石灰岩」が、民俗についての説明のなかで「ワタンジ」が解説されたにとどまる。
- 10) この特徴は、石垣島の自然体験型観光事業者が最も多く所属している「安全協議会」のエコツアーガイドライン(「地域共生ガイドライン」の項)において、「地域生活・文化・景観への配慮」と「地域への還元」が重視され、「継承」には言及されない点にも看取できる。
- 11) 本稿で用いる「眺めるための知識・技能」／「かかわるための知識・技能」の対比は、松村が西表島の「エコツーリズム」を検討する際に用いたフレームである(松村2001)。また、鹿熊(2006)は、サンゴ礁生態系へのかかわり方について、生態系や生物多様性を優先し『見る』ことで利用する考え方を「西洋式」、漁業による利用やサンゴ礁とのつながりを優先する考え方を「アジア太平洋式」として区別し、議論を展開している。
- 12) 2010年の講演会は8月19日に名蔵公民館で、8月20日に石垣市立図書館で、どちらも石垣市教育委員会文化課の後援をうけて開催した。2011年の講演会は、8月19日に名蔵公民館で、石垣市教育委員会文化課との共催で8月20日に石垣市立図書館で開催した(詳細は下田2010、2011を参照)。筆者はすべての講演会の企画と運営に携わった。
- 13) マイクロアトールとは、サンゴ礁地形である環礁(アトール)のように、長い時間をかけて形成された単一のサンゴ群落のことを指す。サンゴの群落が海面から出るとの高さに成長すると、頂部(上部)のサンゴが死滅し、それ以上は上方に成長できなくなる。したがって、マイクロアトールの頂部の高度、年代、分布を調べることによって、過去の環境変動にアプローチすることが可能となる。
- 14) 近年、「参加型アクションリサーチ(participatory action research, PAR)」が注目を集めつつある。PARとは、

地域住民やコミュニティなどの当事者と研究者が協働し、計画、実践、そして実践が引き起こした変化についての評価をらせん状に繰り返すことで、問題の解決や関係者間の対話促進をめざす社会的実践としての調査研究活動である (Kemmis & McTaggart 2005)。B02 研究班が開催した講演会には、教師、学生、研究者、会社員、公務員、農家、郷土史家、染色家、「エコツアー事業者」といった多様な職業に従事する、10 代から 80 代までの幅広い年齢層の人々が 110 名以上来場した。講演会に多様な人々が来場した背景には、「地域史」というテーマで講演会を行ったことが関係していると考えられる(cf. Marcucci 2000)。2011 年 8 月 19 日に名蔵公民館で開催した講演会では、講演の後に車座になり歓談する時間があった。そこでは、立場や職業を異にする多様な立場の人々が、昔の風景や暮らしを楽しそうに語り合う様子が印象的であった。先述したように、立場を越えて多様な人々を結ぶということが石垣島で大きなテーマになっているとするならば、研究者のフィールドワークや研究成果そのものにも、人と人をつなぐ媒体としての機能を求めることができるだろう。

【参考文献】

- 安溪遊地.1995.「島は誰のもの—“ヤマネコの島”からの問いかけ」『地理』40 (9) :43-48.
- 福田珠己.1996.「赤瓦は何を語るか—翁輪八重山諸島竹富島における町並み保存運動—」『地理学評論』69-A-9:727-743.
- エコツーリズム推進協議会. n.d. 「1999 年度 エコツーリズム推進協議会年報」.
- 池田光穂.1996.「コスタリカのエコ・ツーリズム」青木保ほか(編)『岩波講座文化人類学 第7巻 移動の民俗誌』岩波書店.
- 石垣金星. 2000.「西表島から島おこしを考える」『地域開発』426:52-60 .
- 石垣金星ほか.1994.『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥー西表島エコツーリズムガイドブック』西表島エコツーリズム協会.
- 石垣市.2010.「石垣市観光基本計画」.
- 海津ゆりえ・橋本俊哉・真板昭夫.1997.「エコツーリズムの実践における資源管理システムの研究 —西表島をケースステディとして」『日本観光学会第 12 回全国大会論文集』:55-64.
- 海津ゆりえ・真板昭夫.2001.「西表島におけるエコツーリズム発展過程の史的考察」『国立民族学博物館調査報告』23:211-239.
- 鹿熊信一郎.2006.「熱帯亜熱帯における MPA・サンゴ礁保全・エコツーリズムの課題と対策—沖縄県座間味村とアジア太平洋島嶼国を事例として」新崎盛暉(編)『過疎化・超高齢化に直面する沖縄「近海離島」における持続的発展モデルの構築—戦後沖縄の離島社会における社会変動に関する環境史的研究』平成 15~17 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書:101-119.
- Kemmis, S & McTaggart, R. 2005, “Participatory action research: communicative action and the public sphere”. In Denzin N, Lincoln Y, eds. *Handbook of Qualitative Research*, 3rd edn. Beverley Hills, CA: Sage Publications.
- 菊地直樹.1999.「エコ・ツーリズムの分析視角に向けて —エコ・ツーリズムにおける『地域住民』と『自然』の検討を通して—」『環境社会学研究』5 :136-151.
- 鬼頭秀一.1998.「環境運動/環境理念研究における『よそ者』論の射程—諫早湾と奄美大島の『自然の権利』訴

- 訟の事例を中心に一『環境社会学研究』4: 44-59.
- 真板昭夫.2001.「エコツーリズムの定義と概念形成にかかわる史的考察」『国立民族学博物館調査報告』23:15-40.
- Marcucci, D.J. 2000. “Landscape history as a planning tool”. *Landscape and Urban Planning* 49:67-81.
- 松村正治.2001.「八重山諸島におけるツーリズム研究のための基礎調査—竹富島・西表島・小浜島の人々と自然とのかかわりの変遷—」『アジア・太平洋の環境・開発・文化』2:140-202.
- 森田真也.1997.「観光と『伝統文化』の意識化—沖縄県竹富島の事例から—」『日本民俗学』209:33-65.
- 日本交通公社.2008.「平成19年度 八重山観光の動態及び波及効果等調査報告書」.
- 沖縄県.2009.「観光要覧 平成20年度版」.
- .2012.「観光要覧 平成23年度版」.
- 下田健太郎.2010.「B02 班成果公開講演会の報告」『サンゴ礁学 NewsLetter』Vol.4: 6.
- .2011.「石垣島成果公開講演会（第3弾・4弾）の報告」『サンゴ礁学 NewsLetter』Vol.5:7.
- 下休場千秋.2006.「エコツーリズムにおける文化遺産の価値—カメルーン共和国、ティカールの事例」『国立民族学博物館研究報告』61:115-149.
- 多田治.2007.「『ウチナー／ヤマト』をめぐる現実の複雑さと二重性」『環【歴史・環境・文明】』30 :289-292.
- 家中茂.2007.「社会関係のなかの資源 —渡良間海域サンゴ礁をめぐる—」松井健（編）『自然の資源化 資源人類学06』弘文堂.

(しもだ けんたろう 慶應義塾大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC)